



AFRIRAMPO



その夜のブライトンは、普段の景色…寒さに変わらず露出度の高いブロード集団や、バブ帰りのカップルの波と一点交って、バックバックを背負い、しっかりと着込んだ女の子達や、ピアスと黒一色のパンクな女の子達のグループで埋まっていた。パーティ探しと散歩を兼ねて、友人何人かと通りを歩いていると、そのような集団の一つから、一人が背中の荷物の重さも忘れたように駆け足でかけてくるのが見えた。暗さで間近になるまで分からなかったが、寒さの中に凍える顔一杯に大きく広がる笑顔と共に、表れたのは、夏の終わりに会って以来連絡が途絶えていたポーランド出身のゴシカだった。そういうえば、絶対にレディフェストでは会おうね、って言っていたっけ…。

90年代前半のライオット・ガールズという動きから発したレディフェストという名を、ル・ティグラヤビキニ・キルなどのファンならば言うまでもなく、耳にしたことがある人は多いかと思う。オリンピックで2000年に始まったレディフェストは、利益修得を目的としない手作りのフェスティバルで、女性を中心としたボランティアによって構成される。女性やクイアによるインディペンデントな音楽や様々なアートプロジェクトを支援、奨励しようという目的のもとで、欧州、北米を中心に50以上の都市で95回以上も開催されているフェスティバルである。ライブだけでなく、数々のワークショップやディスカッションなどが開催される。そのレディフェストが、この10月にはイギリス南方の海辺の街、エレクトラレインの出身地であるブライトンで行われた。今回はイベントが作られていく段階と5日間わたるイベントの様態などをギグ中心にレポートしてみた。

ソロ、女性をフロントとしたトリオでPJハーヴェイとアニー・ディ・フランコ風の音を奏でるギークガール、全員女性のスカ・パンク・バンド、ザ・チェリー・ボマーズ等、その他数多くのバンドとミュージシャンに支えられてきた。小さな箱で行われることが多く、男性の数も割と多いが、女性中心ということもあってか、お酒落で和やかな雰囲気。手作りケーキがあったり、ファンジやレコードの売られているコーナーが没出。ギグの他にも小さなマーケットや、フェミニストなポルノの上映会が開かれたりもした。レディフェストを知ったり、オーガナイザーと話をして、参加していく人も多かったようである。イベントの多さと人々の熱意には圧倒されるものがある。

本番が近付いた10月半ば、近所で出会うオーガナイザーの顔からも普段のほのぼの感が消えていく。どうもプログラムのプリントが遅れているようである。結局、プログラムはオープニング直前まで表れず、また同じ週末ロンドンでアナーキスト・ブック・フェアがあることもあり、ブライトン住人の移動が見られる模様。また、そのためにより一層性別による分化がおこるという批判もあつたが、ロンドンやその他から多くの人が集まることを期待。また、遠くからやってくる人のための、宿泊場所を用意するために、地元のアナキストも協力して、夜中にスクワット用の空家探しが始まる。

★そして週末が始まる

オープニングの水曜日の夜は、メジャー路線のヒップホップで活躍するM2フォンテーヌとバンティvs.チキンシートのギグから。観客はフォンテーヌ嬢のシャイでセクシーなカッコよさに目当てがレズビアン層がかなり高く、その熱い声援が会場をうめる。

木曜日には、参加者によるアート作品を展示した教会を会場として、リアン・ホールとシェリーによるギグが行われた。リアンはアコースティック・ギターでその人柄にも合ったあたたかな音で寒い会場を包んでくれた。Music For Oneというタイトルのものでは、シェリーがシンセサイザーとコンピュータ、ペダルの前に一人で立ち、クールなおもむきで実験的な音を次々と奏でる。

週末初日、金曜日のラインナップは割と小さなクラブで、地元バンド、ユーチ (Yuchi) からスタート。ざざざ感のあるローファイで叫びの混ざった強靱な音の特徴の彼らは2曲ほど新曲を演奏。ザ・コリー・O'sは、ちょっと変わった不規則なリズム感のギターの不協和音とギーギー声でかなり恐いボーカル。パラノイアと不愉快さが彼らの特徴なんじゃないかという声もある。ジェニー・ウィルソンはジョニ・ミッチェルっぽい感じのスウェーデン出身のボーカル。ちょっとまじめに行き過ぎかな、とも思えたが、箱のせまさに窮屈そうにしていたせいかもしれない。最後のパーティーラインはライオット・ガールの伝説の人となっているアリソン・ウォルフ (前ブラットモービルのフロント) の新バンド。彼女曰く、その名はパーティーしながら政治的でありたいというところからくるらしい。実際、音はそれほど代りが無いようにも思われるが、それもアリソンのオリジナルな声のせいだろう。スピード感のあるパンクは頑強なドラムに支えられ、夜をしめくくるに最適だった。友達のコシアにばったり出会ったのは、そんなギグを見終えた後、独りかと思えば、その後からフランスから来たギャバDJのガールフレンド、ポーランドからレディフェストのためにわざわざ駆け付けられた友達が続々と表れる。翌日のワークショップで出会うことを約束し、宿泊所 (無料) となっているスクワットまでの道のりを説明して別れをつけた。

★盛りだくさんの土曜日

土曜日は、朝から夜中までワークショップ、映画上映、ギグなどが3か所に渡って行われ、スケジュールがぎっしり。ラディカル・フェミニスト系や政治系の本がたくさんそろったベジタリアン・カフェ (ポラン

The Two Paths
Thursday Jan 6
7:30 - 11
at the penthouse
above the front!

What Will the Girl Become?

LADYFEST IS HAPPENIN'

DISCOGRAPHY
STORY OF RESISTANCE
MUSIC BY WOMEN
WOMEN DJ'S PLAYING
MUSIC BY WOMEN
RECORDS BY WOMEN
CAKES AND TREATS!
A LOVE STORY
PURE JUICE, BAWLY SONGS & SONGS
SING SONGS, FUNK, DISCO,
HOT DRINK & MUCH MORE
AN ARTIST
AN ARTIST

GET INVOLVED! ladyfest@rntn@yahoo.co.uk

フェスティバル資金を集めるためのDJイベントのフライヤー

Ladyfest Brighton

女性を中心としたボランティアによって運営されるイベント、レディフェストが2005年10月後半、ブライトンで開催された。その一部始終を詳細レポートする。

文/浅水

★準備もイベントの一部

ブライトンでレディフェストがあるという噂が流れ始めたのは、昨年春の初めごろ。グループメールから始まった集まりは、オーガナイザーの個人宅で行われる無数のミーティングと資金作成のための数々のイベントへと進んでいった。参加者は、あまり苦にする様子もなく、気軽を楽しんでいる様子だった。たまに、フェミニズムの授業からコピーしてきたかと思うような台詞が会話に紛れるところが初々しい。秋が近付くにつれ、ミーティングの頻度も多くなり、開催直前週末まで続く。

プロモーションと資金作成のためのイベントは、1月に始まって10月まで、月2、3回以上の頻度で合計13回以上。ブライトンだけでなく、ロンドンやブリストルでも行われた。出演者の多くは、主に地元をベースとし、資金作成のために無料で参加。地元ベースのダークでシックなジャズを奏でる女性トリオのDREI、アコースティック・ギターと女性ボーカルのブラッド・レッド・シューズ、キャット・ナップ、DREIのチェロ奏者ベラ・エマーン



ファンジンがズラリと並んだテーブル

ディアのみで運営され非営利団体)に手伝いがてら出かける、その外では普段見かけない、お洒落でインディーな服装の女の子たちや、モヒカンの女の子たちが集まっている。

ワークショップの中で特に人気だったのは、シルクスクリーンの作り方、過去のレディフェスト参加者を囲んだ話合い、人種問題について、Music For Oneで演奏もしたシェリーによるコンピュータを使った音楽づくりと録音講座。「どうも説明が分かりやすくて評判だった。女性で音楽をやりたい人、やっている人は多くなっているけれど、コンピューター音楽系や録音器具の使い方となると、まだまだ敷居が高いと思う人が多いらしい。音楽業界も、どうしても男性が占めていて、知っていなければそれまでという雰囲気が多いけれど、この機会に実はこんなに簡単に、割とどんなコンピューターでもできる、っていうのを実感してもらえたらいいな」とシェリーは話していた。

昼時になると、ボランティアの手伝いで大きな鍋がテーブルの上に登場し、皆続々と列をなす。乳製品を使わないベジタリアン料理が配給され、料金は寄付のみである。ヨーロッパ各地から駆け寄った女の子達にとっては嬉しい知らせ。

食事もそこそこに、海辺方面に自転車走らせてバブの2階にある小さな劇場へ向かうと、外には長い列が。10分ほどして、ドアを仕切っていたオーガナイザーのベスが申し訳なさそうに言う。「えー、ここまでで、満員ということ……。これはかなり悲しい。ライオット・ガールの起源をたどったドキュメンタリー「Don't Need You」の上映後、レディフェスト初期発起者の2人、アリソン・ウォルフとピキニ・キルのトビー・ヴェイルを招き、ブライトン・レディフェスト発起者のレッド(Red)がパネルディスカッションを行う。「中一杯男の人が入ってくるの見たんだけどー。女性のための大阪からの“あぶりらんぼ”と前ヴァレリーから二人を引き継いでいるフェイク・ヴァレリー・アクション。彼女たちは既に汗だくなっている。食事のままならぬ様子。あぶりらんぼの二人はロンドンから急に回されたとのこと、進みの遅さに少々困感さみだった。開場後は、着飾った学生達が多く登場。男性のジャケット姿も目立つ。会場について禁煙のためとバーの小ささのため不満の声もあったが、蔵が巧い具合に社交場となっている。

夜のギグは、そんな不満も打ち消すような充実したものであった。箱はブライトン大学の一部であるシアターを利用。バンドのための食事供給の手伝いも兼ねて、バックステージに待機しているうちに、会場の外では、ファンジンやレコード、バッジなどを並べたテーブルが続々と出現。リハーサルで聞いたのは大阪からの“あぶりらんぼ”と前ヴァレリーから二人を引き継いでいるフェイク・ヴァレリー・アクション。彼女たちは既に汗だくなっている。食事のままならぬ様子。あぶりらんぼの二人はロンドンから急に回されたとのこと、進みの遅さに少々困感さみだった。開場後は、着飾った学生達が多く登場。男性のジャケット姿も目立つ。会場について禁煙のためとバーの小ささのため不満の声もあったが、蔵が巧い具合に社交場となっている。

スタートを飾ったのはフェイク・ヴァレリー・アクション。ビートに駆り立てられ、スローガンを投げかけながら、汗だくなっている。演奏するバンクなロックンロール。初期レディフェストの熱意とD.I.Y.感覚とフレッシュさを思わせる。演奏後、会場後のファンジン・コーナーで雑誌を買いたい、庭で参加者と飲みほうけていたり、なんとも気取りがなく、真のエンターテナーという感じ。そのまっすぐ逆を行くのは、ザ・ホーリー・ジャン・クワン・バンド(The Polly Shang Kuan Band)。かなり実録色の高いノイズと不協和音を、シュールなパフォーマンスできめていた。会場を、東方のワイルドな女の子達というイメージと、強弱で高度なドラマ演奏で熱狂させたのは、あぶりらんぼ。周囲から「何て言ってるの?」と声がかかる中、自分としては歌詞が分からないという方が良いのかもという気もしたが、演奏技術の高さは抜きに出ている。ステージから、会場で観衆の間に降りたの演奏も、継ぎ目なくこなすという、サービスマン的なパフォーマンスには目を見張るものがあった。最後を飾ったのは、最近初来日も果たしたエレクトラレーン。「地元でのレディフェストに出られ



ELECTRELANE

地元ブライトンをベースに活動する女性バンド、エレクトラレーン

たことを誇りに思うよ」とヴェリディがそのクールな調子で観衆に呼び掛ける。新作のみならず、全アルバムを通して巧く曲目をミックスし、熱心なファンを満足させていたようだった。もちろんアンコールにも落ち着いて答えて帰ってきた。そのうち、そこで即効のジャズっぽいところまで演奏するようになるのだろうか……

★ 最終日のエピソード

日曜には昼の1時から夜の10時半までという、トビー・ヴェイルの新バンドスバイダー・アンド・ザ・ウェブスをフィーチャーした終日のギグがあった。10ほどのバンドが演奏するなか、印象に残ったのは、トビーの演奏の他に、資金設立時のギグでも演奏していたベラ・エマーソンのチェロ演奏。小さな体で大きなチェロを抱え、迫力と凄みのある音を引くのだ。ゴシカとその友達達は終日ギグに行ったあと、そのままレディフェストDJ達が音を担当するクラブへと流れていったが、自分にはそんな体力は残されていなかった。そんなことで、実はあるハプニングを見逃してしまったのだ。

終日の夜を飾るイベントは、とあるレズビアン・クラブ(女性のみ、あるいは女性に付き添われたゲイ男性のみ入場)で行われたのだが、なんと踊り場で警察を呼ぶような騒動が。参加者の一人が、熱くなって(文字どおり)上着を脱いで裸になったところ、警備員がやってきて注意。それにムかついた多くの女の子達が「男は許されるのに、なんでいけないのさ!」ということで殴り合いも入る喧嘩に。引き出された当人を追って、その友達のみならず、多くの人が外に同行し、クラブ側によって喧嘩に入った人が警察へ連行されてしまったという。男女平等への道は険しい? …レディフェストの存在意義をつくづく考えさせられるエピソードだった。

最後に、発起者レッドから寄せられたメッセージを紹介しておこう。

「2001年グラスゴーで行われたUK初のレディフェストからずっとワークショップをしてきたこともあって、自然な流れになったオーガナイザーだけれど、終わってみると、ブライトンレディフェストは思いもよらない成功ぶりで資金作成もうまく行き、かなりの収益を女性援助団体に寄付することまでできてしまった。皆のどうしても成功して欲しいという思いがあったからこそ。発起者の時点ではブライトンで一人だと思っていたことを考えると、最初が集まった人たちが皆、最後まで一緒だったことに、一番感激。若いフェミニストに会えたことも良かった。フェミニズムとD.I.Y.カルチャーが合体して、こんなに力づけられるイベントなんてほかに無い! 今後のレディフェストのためへのメッセージとしては、プレスと促進部があると最初からもっと広域の女性にメッセージが届かために企画だと思う。そして、一年前からもう少し先を見て、計画を立てて、私たちのように、初日の朝5時まで起きてプログラムまとめた、なんてことが無くてすむように」。



VALERIE



THE POLLY SHANG KUAN BAND



SMARTY PANTS



日本でのレディフェストの開催を考えている方、支援したいと思う方、ぜひ連絡下さい。
[編注: 編集部にメールを頂ければ、筆者に転送します。]